

(第6回)紫式部はどんな人？ の回答

滋賀県大津市石山寺

紫式部(むらさきしきぶ)は、平安時代中期の作家・歌人、女房(女官)。天禄元年(970年)から天元元年(978年)の間に生まれ、寛仁3年(1019年)までは存命した。下級貴族出身の紫式部は、20代後半で藤原宣孝と結婚し一女をもうけたが、結婚後3年ほどで夫と死別し、その現実を忘れるために物語を書き始めた。これが『源氏物語』の始まりである。当時は紙が貴重だったため、紙の提供者がいればその都度書き、仲間内で批評し合うなどして楽しんでいたが、その物語の評判から摂政関白藤原道長が娘の中宮彰子の家庭教師として紫式部を招いた。それを機に宮中に上がった紫式部は、宮仕えをしながら藤原道長の支援の下で物語を書き続け、54帖からなる『源氏物語』が完成した。およそ500名近くの人物が登場し、70年あまりの出来事が描かれた長編で、800首弱の和歌を含む典型的な王朝物語である。物語としての虚構の秀逸、心理描写の巧みさ、筋立ての巧緻、あるいはその文章の美と美意識の鋭さなどから、日本文学史上の最高傑作とされる。『小倉百人一首』の「めぐりあひて見しやそれともわかぬまに雲がくれにし夜半の月かな」の作者)。

紫式部は、藤原道長の要請で宮中に上がった際に宮中の様子を書いた『紫式部日記』を残している。この紫式部日記の島内景二さんによる解説書が最近出版されたが、これによると紫式部日記は

4部構成。以下に簡単にそれぞれを紹介する。

第1部 一条天皇の御代寛弘5年(1008年)藤原道長の娘中宮彰子が入内して9年目にやっと第一親王を出産した年の大みそかまでの中宮の女房として体験した数々の皇子誕生を祝う宮中行事を中心に長い話が続く。その最後は大みそかの夜に天皇の住まう清涼殿に泥棒が入り女官二人がみぐるみはがれて震えているという話。道長が我が世の春と讃えた時代は大江山の酒呑童子が都を荒らす時代でもあったが宮中にも強盗跋扈とは信じられない。

第2部 寛弘6年(1009年)親王誕生の宮中元旦行事に伺候する中宮の上臈女房3人の美しい容姿、立姿、装いをもめそやす短いもの。

第3部 第2部に引き続き、その他の中宮付き女房達の姿、装いの批評から始まって自分の弟にあてたその恋人(中宮彰子のサロンとは異なる大齋院宮のサロンに属する女房)の手紙を読んだの大齋院宮のサロンへの反論から自分の考える女房の理想像へと発展。その一方で自己卑下を交えつつも同時代の女流歌人と泉式部、赤染衛門、清少納言を批評。とくに清少納言に対してライバル意識を丸出しに酷評(約10歳年長の清少納言作の枕草子には紫式部の言及はありません)。

第4部 寛弘7年(1010年)ここでは中宮彰子の次の親王出産により、親王出産に纏わる宮中行事の描写から自分と藤原道長の間のお互いの関係性をにのせる意味深長な話で終わります。

紫式部日記は当時の宮中しきたりなど源氏物語の背景を知る上でも貴重な文献だが、紫式部さんは相当近代的な性格の人、どちらかといえば根暗な人でないかというのが私の受けた印象でした。

次号 No. 6 発行予定：令和5年4月頃

次号では当会の事務所 所在地にちなんで源氏物語の作者の宇治十帖に纏わるクイズを予定しています。

シンビオ社会研究会の
ホームページは [こちら](#) →

